
月夜の聖句にご用心！？

深樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の聖句にご用心!?

【Nコード】

N6506F

【作者名】

深樹

【あらすじ】

天使のような顔立ちの金の亡者こと弟・アレク。に、いつも振り回される姉、ミラ。破天荒な弟がもたらした今回の災厄は物騒なもので!?! 「黄昏の魔道書」を探して、奇妙な二人が旅に出る。はてさてお騒がせ一行はどうなるのやら……。

プロローグ…彼と彼女の追憶

全ては戦争の産物だった。

東西南北に散らばった諸国らは他国の領土に見果てぬ夢を描き。
ただそこから生まれたのは飢えと渇きと絶望と。

ああ、どこかでまたひとつ

降りかかるものは雨ではなく血飛沫で。世界の目覚めは人々の悲鳴から。呪詛のような呻きは地の底を這うように。涙はもう流れない。

心が壊れた音がする

もう一度言おう。全ての悲劇は戦争が喚んだ。

そして歴史が繰り返されるようにその悲劇を享受するのはいつも弱者だ。

断罪は行われない

語り部は謡う。

これはまだ物語の序幕に過ぎないと。悲劇はこれからが本番さ。

語り部は謡う。

これは悲劇の犠牲になったひとつの姉弟の。

そんな二人の旅の御嚟。

拍手すら起こらずに幕は上がった――

1-1..ランチの珍事

何を言われたか、咄嗟に理解できなかった。

「……は？隣のババアが死体を埋めたって？」

フォークを持つ手を止めて、スパゲッティを咀嚼しながら頭をフル回転させる。

そして脳内にインプットされた言葉を都合よく解釈した結果が、これだ。

神よ、どうか！これが事実となってくれたまえ、と普段は神の存在を欠片ほども信じていないくせにこういふときだけ祈るのはなんというか、神もご苦労様ってな感じである。

そもそも考えてみると他人の犯罪を願っている時点で何かがおかしい。これでいいのか、主人公。

したがって、聖人君子の具現のような神がそのような望みを叶えるはずもなく。

「違うってば。我らがババアの魔具を売ったてこと」

何言ってるの？という表情を浮かべた天使のような顔を前にして

もろともに打ち砕かれていったのだ。

「な……………なあんですってえ!!!!!!!!!!!!!!!!!!?」

「信じらんない……」

「38回目だよ、その台詞。もういい加減にしたら」
「あんたが言うなっ!」

呆然と呟く声に呆れたように割り込んでくる言葉。こうならざるを得ない状況を作った張本人のそれに激昂する自分。こんなやり取りも既に38回目である。

なんだか無性に虚しくなって、自然と溜息がこぼれた。

「それも38回目」

「るさいっ」

一喝してみてもしれっとした顔でいるものだから、怒りも萎えら
ったらありやしない。しかもそうなることを見越してわざとやって
るのだからなおさらタチが悪い。

「ねえ、ミラ姉」

金髪に青い瞳。まさに天使のような整った顔立ち。しっかり者と
いえば聞こえはいいが、その本性はがめついだけの我が弟、アレク。
上目遣いをしてくる悪の権化に本性を知っていても哀しいかな、ど
ぎまぎしてしまうのが常である。

しかし今回はちょっと規模が違う。ここは毅然とした態度で臨まな
ければ！

「何よ、金の亡者」

わざとつんとしたすまし顔で応対してやると腹黒天使はずずいっ
と顔を近づけてきた。

「どうして魔具を売っちゃいけないの？ねえ、どうして？」
「どうしてって…世界の均衡を保つために決まってるでしょ」

自分の弟にやや気圧されながら答える姉。既に数十秒前の誓いは崩れつつある。

自分の答えにアレクは満足気に頷いた。……やな予感。

「だったら自業自得じゃん」

「は？」

？マークを沢山浮かべている姉、ミラにまたもや心底呆れたという風に溜息をつく弟。その様子があまりにわざとらしいと思うのは自分の勘違いなのだろうか。

もう一度、深く溜息をついて口を開くアレク。……殺意が芽生えてくるのはなぜ？

「だからさあ、そんな危ない代物を買う奴らが自分の住む世界を狂わしたとしてもそんなの僕らには関係ないじゃんってことだよ」

「いやいやいやいや」

即、全否定する姉というのもどうかと思うが。

こくんと首をかしげる諸悪の根源を可愛いと思ってしまうのは自分が末期だからだ。

「どうして？何で僕たちが責任を感じなくちゃいけないの？」

そして不満げに口を尖らす諸悪の根源に見とれてしまうのも自分が末期だからであろう。

が、しかし。

前述のとおり、これは規模が違いすぎるのだ。失礼な話だが、隣

家のバアさんが一人殺すほうがマシってなものである。
そもそも。

「あんた、なんで魔具なんて売ったのよ？」

家計もそれほど逼迫してないし、亡き育ての親が創った魔具ほどヤバイものはないことを決して頭の悪くない（むしろ姉の自分より良いのだが、あえてそこは目を逸らす）が心得ていないはずがない。

売却する理由が見つからない。

「え、だって……………」

きょんとした母性をくすぐられるあどけない顔から一転、百戦錬磨の商人の顔へと変わっていく。

何、この黒い笑み。なんて本能が危険信号を送る。

まさかこれは、アレクの十八番――

「世の中、金でマネーしょ？」

この世で一番怖いのは魔具なんかじゃなくて、人と人の黒い欲望だ――。

そう骨身に沁みたミラであった。

1-2: 旅立ちの前の小事件

「支度はできた？」

文句が口から飛び出そうになるのを喉の奥で踏ん張って、それでも皮肉が出てしまった。本日通算43回目となる溜息を吐きながら後ろを振り返る。

そこにはこの世の負の感情を全て背負っているかのような天使がいた。

「まったくなんで僕まで……自業自得だっていうのに……あーめんど」

言うまでもなく弟、アレクである。

地面に座り込んでぶつぶつと聞くに堪えない独り言を呟いているさまは不気味を通り越して黒いモノが背後に渦巻く地帯と化している。

さすがアレク：などと感心している場合ではない。

仕方がないので引き返してアレクの頬を……………

パチンツと小気味のいい音がした。

驚いたように顔を上げたアレクを今度は優しく両手で挟む。外見に似合わず豪胆な性格のアレクには珍しく困惑の色を浮かべていた。澄んだ青い目を覗き込む。

「ごめん」

察しの良い弟はその一言で全てを理解したらしい。柳眉をしかめて溜息をつかれた。いつもの小馬鹿したものではない。

「僕は理性的だからね。よゆうだけど、ミラ姉は……ねえ？ いきなりヒステリーおこされたらどうしよう、ってことを懸念してるんだよ。ただでさえ僕、ナイーブなのに」

おどけた仕草で憎まれ口をたたくがそこに軽さは、ない。むしろ重い。重くて、昏い。

心配しているのだ。彼なりに自分のことを。

それが痛いほどよく解ったから、何も言わなかった。こういうとき、安易な言葉で流せるほど簡単な相手ではないことを、誰よりも長い時間を共にしてきた自分が一番知っている。

返事の代わりにことさらに明るい口調で言う。

「行こっか」

「……うん」

言葉と同時に立ち上がると、自分よりも少しだけ低い影もひよこりと後に続く。

いつの間にか陽はもう傾きかけていた。

「げ」

「あらら」

どうやら準備（とアレクの愚痴）が予想外に長引いてしまったらしい。これでは街を出る前に夜になってしまう。そうなれば最悪、野宿しかない。それだけなら大して痛手でもないが、街である。通りに寝そべっている男女はさぞかし人目につくだろう。宿はあるが路銀がもったいない。よって却下。

というか。

首を捻る。支度を始めたのはランチを食べ終わってすぐである。昼の1時ごろだ。もともと自分たちの親代わりであった老婆のこの家はとことん物がなかったから、片付くのにそう時間はかからない。何でだろうなあ、と今までを回想してみる。

アレクがコップを割って後始末、アレクが荷物を蹴飛ばして後始末、アレクの落書きの後始末………

って全部アレク絡みじゃん!!

「いやあ、残念だったね?」

笑いを多分に含んだ声ではっと我に返る。さび付いた機械のように声の主のほうに首を回した。

「ん?」

満面の笑顔を前になぜか震えが止まらない指を無理やり酷使用する。

「あ、あんた……まさ、か」

「何?」

「わざと、あ、れ……やって………?」

計算づくめの商人根性の天使は問いにはいつこうに答えず、ただ笑みを深くする。

「どうしたの、『お姉ちゃん』?」

「うわあ……」

黒い! 黒いモノが背後に! さっきよりも濃密な黒さだよ!! どうするんだ、こういうとき!

というかよくよく考えてみるとあたしってアレクの黒いところしか見てない気がするんだけど!!

10年以上一緒にいて未だに弟の暴走が読み取れないあたしって……

「ほんとに学習能力ないよねー」

「うぎゃ!？」

思わず変な声が出る。どうして自分の心の叫びが！

「え、それって……読心術で」

「帰ろうか」

「ハイ」

断定口調に壮絶な笑み。正直言ってこの組み合わせほどこの世に邪悪なものはない。弱肉強食の世の中、生まれの早いも遅いもないのさ!……言っててすんごく切ない。あんのくそババア、アレクに変なこと教えるんじゃないってさんざん釘さしといたのに無視しやがって……!!

余談だが、その日の深夜に呪詛を吐きながら藁人形を作り始める姉をアレクがすんでのところで手刀を落として昏睡させたとかさせてないとか。

1-3..ミラの受難

「マジですか……」

「僕はいつでも真面目だけど？」

「~~~~っ死ね！この外道！！」

「うるさいなあ」

朝早くから見苦しいところを見せてゴメンナサイ。でもさあ、いくらなんでも……

「黄昏の魔道書まで売ったってどういうこと！？」

「そういうこと」

「ふざけんなっ！あれは危険中の危険よ、ばれたらどうするの！？」

「逃げる」

「そーゆー問題じゃないっ」

疲れるんですけど……。っていうか、黄昏の魔道書って言ったら秘術満載の世界征服可能な、下手したら人類絶滅なんだけどっ！……まあ、後3人もあのバアさんみたいな熟女がいるから平気だとは思うけど。もしかしたらあのババアたちが……。……いやいやそんな危険な妄想はやめよう。

「確かにあの人たちならやりかねないよねー」

「ぎゃあっ！？」

「……色気ないよ、その声」

ふってぶてしい!!

ああ。

「平穏が欲しい……………」

なんだか本格的にヤバくなっている状況を恨めしそうに嘆くミラであった。

事の始まりは数刻前。ミラの叫び声によって封切られる。

「ちょっと今何時——!!?」

それに答えたのは皆様もご存知、悪の権化こと弟・アレクである。
「8時。……もうちょっと強く叩けば良かった」

最後の台詞に反応するミラ。ひくひくとこめかみが引きつっている。昨晚の弟の仕打ちを思い出したらしい。怒りで手のひらが拳の形になっていた。

「なんですって？」

「何が」

自分の姉の拳が震えだしているのを平然と見やるアレク。あまつさえ人の神経を逆なでするような返答で切り返す様は、既に老獪な貴族のそれである。

しかし相手は猪突猛進の直情型人間。貴族も国王もへったくれもないのだ。というわけで、姉が憤死する前に新たな爆弾でトドメを刺そうと企ててると言う何ともうるわしい弟愛。………多少歪んでいる気がするのはこの際目を瞑ろうとしよう。

そういう次第で。

「黄昏の魔道書もついでに売っというたよ」

そして冒頭の騒ぎへと発展していったのだ。

どうやら姉の受難はまだ始まったばかりのようである――――

!

1-4：黄昏の魔道書

『黄昏の魔道書』

それは世界から封印されし禁忌の書。遙か昔、戦によって歪んだ人々が創り出した負の産物。そこに記されし魔術、空は闇に染められ、地は不毛となり、恵みの海は絶望を呑み込むと言われている。近年の大陸戦争でも使用され莫大な損害をもたらし、死者は総人口の30%にも及んだ。

そのことに御心を痛めた西の魔女、シゼルティ・ローランドは自らを命の危険に晒しながら無事に封印し、保管されている。場所は彼女と四大魔女の三人のみが知ることとなっている。

(ゼフィザーク大陸史

四十四の巻 444ページ)

「……っーことで」

「うん」

「何売っちゃてんだ、貴様アアッ!!」

ドンツとやたら分厚い本というより辞書に近い史料を卓に叩きつける。張本人はご存知、相も変わらず懲りない弟の相手をやっているミラ。さてさて、件の弟はというと――

卓に足を投げ出していた。

「にしても不吉だよねー」

「聞けよッ！」

「四十四巻目の444ページなんてさ」

「ほんと、聞いてないなお前……」

こめかみといわず顔中全体が引きつってきているこちらも変わらず苦労性の姉。姉弟そろって成長の二文字がないようである。

「でもミラ姉だって不吉だと思わない？」

「まあ……」

不吉っていうよりむしろあのババアにはぴったりの数字だと思うが。

「それに見てよコレ」

「え、何？」

見事に論点がそれている。恐るべし、弟。まんまと乗せられているものなのか。

アレクが指し示したのはミラが先ほど叩きつけた史料の、ある一節だった。

『シゼルティ・ローランド別名、西の魔女はその善行により人々から慈悲の神の化身と讃えられている』

「うわぁ……………」

「ね？」

慈悲の神！よりもよって慈悲の神の化身！あのいつも高笑いしてて、ろくに仕事はしないくせに威張りくさってた、ろくでもない魔女が、アレクの腹黒×100みたいなババアが！？な、なんだか背中がむず痒い……………」

「狂ってる……………」

「同感だねえ……………」

うんうんと頷くアレクをよそにすくつと立ち上がる影。あれつと違和感を感じて顔を上げてみれば、

「えーと…………ミラ姉？」

悪魔真っ青の凄絶な笑顔が眼前に降って沸いてきた。

「ねえ、アレク？」

「う、うん」

よく自分のことを悪魔とか腹黒とか金の亡者とか言うけど、そういう類はミラ姉のためにあるのだとアレクはつくづく思う。例えばこんなときとかは特に。

ああ、どうしよう。完全にブチぎれてる。ミラ姉ってストレスが許容量をオーバーしちゃうと見境なくなっちゃうからなあ。悪の道に目覚めたら一番ヤバイタイプ。しかも本人は自覚ゼロで。

なんてつらつらと考えていれば

「話をわざと脱線させやがったな、この外道っ！！！」

本日最大の怒号が閑静な森に響き渡った。

1-5：姉と弟の攻防

「うわっ何コレ、ちよっ、枝が顔に……うええっ!？」

「うざいなあ、この森。………いつそのこと焼き払お」

「ちよいまったあっ!!」

いきなり何を言いますか、この物騒きわまりない弟は。ていうか、それすら慣れかけている自分が恐ろしい。コレって、毒されているってことになったり………いやいやいやいやいや。

「……何やってるの、ミラ姉」

珍妙な生き物を見るかのような視線を向けるアレク。て、ちよっと待て。あたしは何もかも正常だ。というか、あたしを心配するより自分の腹黒さを自覚してくれ。

「頭をぶんぶん振って……うわ、きもちわる」

「いや、気持ち悪いことをしていたのは認めるけど、何で本人目の前で言うわけ？」

「あーあ、ミラ姉があんなことを言い出さなければこんなめんどくさいこと………」

「そっち!?!?ていうかまだ根に持ってるわけ!?!」

ことの起こりは数時間前。

ミラがブチぎれてから一息たったところ、怒りもだんだんと収まった本人はおもむろに言ったのだ。

「行くわよ」

「どこに？」

「あのババアと同類の熟女のところによ！」

口に出すことさえ恐ろしげにからだをぶるりと震わせる姉に、やっぱり懲りない弟はぼそりと要らんことを呟いた。

「あれはもう熟女を超えて山姥だと僕は思うけどね」

「いうなあっ！」

幽霊妖怪なまはげにあの世。ミラの大嫌いなもの&超怖いもののオンパレードである。

（でもさあ）

とアレクはつくづく思うのだ。

（あの世ってことは天国も怖いのか？）

それは聖職者として色々とまずいのではないのだろうか。

（まあ、ミラ姉もそうは問屋が卸さぬってことかな）

いつの時代の言葉だ。

まあ、それはどこかに置いといて。

「ほんつとうにあの人たちのところに行くの？」

「しょうがないでしょっ、なんか癪だけどそうしなきゃ魔道書も見つからないし」

「まあそうだけどさあ」

不服そうに呟く弟を横目で見やるミラ。あたしだって行きたきやないわよ、あんな変人どものところなんかは。

そもそも。

「あんたが売ったからでしょーに」

「誰から訪ねるの？」

あっさり話逸らしやがりますか、この腹黒天使め。

などと心では悪態をつくが、アレクの言うとおりでいつからにするのは確かに悩みどころだ。何しろ誰が一番変人の中でましか、ということである。自分に見ればどいつもこいつも変人に違いはない。はてさて一体どうしたものやら。

「ううん……やっぱり南じゃない？ ちょっとおかしいけど気さくだし」

「甘いね、ミラ姉」

………自分のほうが背は高いはずなのに見下され感がするのは気のせいだろうか。

「南のババアはとんだ食わせ物だよ。口悪いし性格悪いし根性悪いし」

「……」

それ、全部あんたにも当てはまる気がぶんぶんするんですけど。

「何？」

「……南は無しっと」

ここはあえてアレクの言うとおりにしよう。アレクは昔っから妙に勘が鋭かったし、それよりも今回、これほど自分の特徴を言い当てることができたということは余程あのバアさんとは馬が合わないのだろう。いわゆる同族嫌悪というやつだ。

「とすると、残りは東か北か、だよねえ」

「北がいいよ」

「え……ナゼ」

個人的にはどうもあのバアさんは苦手なのだが。頑固だし融通は利かないし厳格だし。

「つまりミラ姉のパワーアップ版だね。俗に言う同族嫌悪ってやつかな」

キサマ……また読心術を……………。

「でもミラ姉もさっき僕と南は瓜二つだって思ってたよね？」

ギクッ！

「あんたまさか最初から…………？」

「もちろん」

にっこり微笑んだ悪の権化こと金の亡者こと腹黒天使に平和主義者こと一般市民こと苦労性な姉が叶うはずもなく。

「北がいいな、僕」

「ハイ…………」

只今こうして北に行くための最大の難所、迷いの森で遭難しかかっているというわけだ。

1-6：不幸は続くよ、どこまでも

「ねえ、ちょっと……」

「うん？」

「あれってどう見てもさあ………」

「うん」

「レーランスの王国騎士じゃないのよ……！」

遭難しかかって数時間後。

うざったい木の枝やら鳥やら熊やら果てはゴブリン、イタズラ好きのピエロまでなんだか無駄に濃いメンバーが道を塞いで、とても難儀きわまりないものになった。

後半部分もう堪忍袋の緒が悲鳴を出すほどまでになり、ピエロなんかは蹴飛ばし投げ飛ばし振り回し、棄てた。その後どうなったかは知らないが、くたばればいいと思う。

「聖職者のくせに物騒なことだねー」

「うっさいわね、あれは人なんかじゃないわよ。人間に化けた低俗な悪魔だったし」

なんていうか、アレクの読心術に慣れてきている自分が恐ろしい。ブルリと身体を震わせるミラの横で、珍しくへえ、と感心したよ
うな声を出す弟。

「さすが悪魔祓いってどこかな？」

「精霊遣いのあんたに言われたかないわよ」

悪魔祓いと精霊遣い。

両者とも希少な存在で、この世に数多い魔術師とは一線を画すものだ。

悪魔祓いは別名エクソシストともいわれ、神に仕える聖職者のごくごく一部のものが活躍している。そもそも聖職者自体が神学校のエリートでなければならぬため、絶対数があまり多くないのだ。悪魔祓いはその中の才能ある者たちである。悪魔祓いといってもその威力は普通の上級魔術師とそう変わりはない。

が、相手が悪魔など神に反するものだとは俄然違ってくるのだ。ミラのように人や動物に化けている悪魔の姿も見えてくるし、素手で掴むこともできる。

精霊遣いはもっと数が少ない。神に仕えなくてもいいし特別な専門学校に通うこともしないが、精霊に好かれる体質でなくてはいい。そのうえ、精霊がそばにいるという、圧倒的な力に押しつぶされない体力知力、心胆が必須となってくる。精霊の力に負けてしまえば下手すると死に至ることもある。いくら好かれようとも精霊の力を借りれないのだ。

しかし、アレクのように基準を満たささえすれば精霊という人にはあらゆる力を発揮できるようになる。魔術師は水や火、土に治癒など色々な系統に分かれその系統のみしか使えないが、精霊遣いは全て可能だ。その威力も普通の魔術師には到底及ばない。悪魔などの退治はさすがに悪魔祓いのほうが上だが。

というわけで最後のピエロ以外はアレクにちゃっちゃと片付けてもらった。悪魔祓いは長々と聖句を唱えなければならぬのに対し、精霊は一言お願いして相手をどうするかを心で思い描けば済むからだ。

で、何とか迷いの森の最奥、北の魔女の館までたどり着いたのだが。

「何でレーランスが……」

「あのババアって人嫌いのはずじゃなかったけなあ」

なぜ北の軍事大国レーランスの王国騎士が館の門前を警備しているだろう。

なぜよりもよってレーランス。

「神様って絶対いない……」

悪魔祓いと精霊使いに幸せは訪れるのか。
甚だ疑問のミラであった。

1-7: 王国騎士と一般市民

『レーランス』

大陸の五大国、南の農業国セラクード、東の学問国家フィラウ、西の魔法大国セイシャル、そして中央の宗教国家サラフィアーナの一柱を成す軍事大国である。

その特徴はやはり騎士団、傭兵などの多さにある。レーランスの王国騎士といえば有名で、武力もさることながら智謀策謀にも長け、用兵に通じていると名高い。レーランスに攻められればどのような国にも勝機は無いとも言われている。

現在東のフィラウと同盟を結んでいる。

（大陸全史 五つの大国と島々の章から抜粋）

「……………で」

「人嫌いのはずなのにね」

ただいまレーランスの王国騎士を遠くから眺め中。

門前を見張る騎士に油断は無い。レーランスのブランドは伊達ではないということか。

「なんか、隙を窺うだけ無駄じゃない？」

もうかれこれ小一時間はこうして藪の中に身を潜めているのだ。じっとしているのも辛くなってきたし、何より見つかるのも時間の問題な気がしないでもない。

「……そうだね」

どうやらアレクも辛くなってきたようである。姉弟そろって体力が無いのは果たしていかなものか。

などと自分達の老後を早くも懸念していた姉だが、

「ちょ、ちよっと何してんのよあんだ！」

がさごそと藪の中を出ようとしている弟を見て吃驚する。声を潜めながら怒鳴るといいうのは何とも矛盾しているが、これがミラの必殺技だ。何とも頼りないのだが。

慌てて止めようとした姉に弟は一言。

「え？あのババアを一発殴るんじゃないの？」

老人愛護のかけらも無い言葉をのたまったのだ。

さてさて、そんな姉弟の騒ぎをうわさの王国騎士様が見逃すはずがない。

「おいっそこで何をしている！」

鋭く目を光らせながら誰何の声を上げる騎士。一般人ならばその威圧感溢れる声にすくみあがってしまうのだが。

「あーあ、ミラ姉のせいで見つかった」

「あたしのせいだよっ！」

あいにくこの姉弟は一般人とはかけ離れた人種だった。
さすがは西の魔女（変態とミラは評すが）に鍛えられているだけ
はある。肝っ玉ならそこらのチンピラどもにも負けないぐらいはあ
るのだろう（嬉しくないけど）。

が、しかし。

一介の王国騎士がそんなことを知っているわけはなく。
当然であるが、普通に不審者とみなすわけで。
そして不審者には武力を以って言うことを聞かせるのがレーラン
ス流なわけで。

やっぱり武器をこちらに構えるんですね。

だけど幸か不幸か平和なセイシャルで育った師弟にレーランスの
常識はわからない。

っーわけで。

「さっさと出てこい！ さもないと……」

カチリと硬質な音がした。ミラさんはその正体を認めてサーと青
ざめる。

「え？ え？ え？ う、うそっ！」

「さすが軍事大国っていわれるだけあるねー」

「感心してる場合かっ！！」

ここセイシャルでは珍しい銃がこちらに向けられていた。

黒々とした銃口に身の危険を覚えるミラ。
それに反して飄々とした態度を崩さないアレク。

ヤバイ。なんかもうグレちゃうよ。

「涙でできそう……………」

苦労性の姉に未来はあるのか、否か。

早くも旅の危機が訪れようとしている一行である。

（どうしてあたしってこんなにツイてないの————！
？）

1-8: セルドの災難

その話を待ってきたのは自分の上司でもあり、尊敬する人でもある人だった。レーランス王国騎士団団長————もし自分に拒否権があったとしても彼に逆らうなんて到底できそうにない。だからその依頼の真相を知っていたとしても、おそらく断ることはできなかっただろう。

『北の魔女、ラストイーナ・ファセント邸の護衛』

人嫌いで通っている彼女が何をいまさら護衛など頼むのか。

彼——セルド・ライアンはやっと解った気がした。

すぐに気配はわかった。藪の中で自分よりも低い背丈の二人組みがこちらを窺っているのは。どうしてここが北の魔女の家だと嗅ぎ付けたのかは知らないが、敵意らしいものは微塵にも感じられなかったから、おそらくは好奇心で覗きに來ただけだろう。そう思ってたのだが。

一時間。

一時間しても一向に立ち去る様子がない。それどころかがささそと動いている。

まさか

(家ごと爆発させる気か……!?)

すぐさま銃を抜き出して脅してみる。今の時世、レーランスでもなければ抜き身の銃なんてお目にかかったことすらないだろう。慌てて騒いでいるのが判った。そして前に出るように指示する。

藪を掻き分けて出てきた二人の姿は

(なっ……まさかこんなに小さいとは……………)

十五ほどの黒目黒髪の少女と、それより二つか三つ幼い少年。爆発物を持っている様子もなく、いたって普通である。

一体何をしにやってきたのか。

「え？あのババアを一発殴り」

「あ、なんでもないですー。あはは」

……なんだか聞き捨てならないことを聞いてしまった気がしたが、それよりも。

「なぜ、判った？」

俺の考えていることをどうやって読み取った。

金髪碧眼の整った顔立ちの少年に警戒心を抱く。小首を傾げる少年。しばらく考えて

「読心術を習得してるから？」

なぜに疑問系。

「ってかさー、早く出してくんない？」

「何を」

「ババア」

「アレクッ」

慌ててアレクという少年の口を塞ぐ少女。

その様子を見て、

「姉弟か？」

苦労しそうな姉だ。

「あ、そうなんですー。あはは」

ワンパターンだな、オイ。

危うく突っ込みかけてすぐさま呑み込む。
任務に就いてる最中に私語は禁物だ。

「ババア、とは？」

冷静に、冷静に。

「北の魔女のことだけど？」

「……は？」

開いた口が塞がらない。

今、何て？

「だから、ラストイーナ・ファセントを出せって」

また思考を読みやがったな………ってそんなことはもはやどうでも良い。

「ラストイーナ様を、ババア？」

「あっちゃー」

少年の姉が額に手をやっている。

んなことしてる前に弟のしつけを何とかしろっ！

「……」

少女がなぜか押し黙る。

「あーあ。ミラ姉怒らせちゃった。知らないよ、僕」

「何の話だ」

「声、出っちゃってんの」

「？」

「だーかーらー」

めんどくさそうに彼は口を開く。

「しつけを何とかしろって」

ピキッ。

なんだか聞きなれない音がした瞬間。
若き王国騎士、セルドの意識はブラックアウトした。

1-9：喧嘩勃発

「それで？」

「はあ」

「何しに来た」

「一発、殴」

「ちよっと相談を。あははー」

ども。

なんか記憶がぶっ飛んで只今北のババアの邸宅にいます。
何があったんだとアレクに問い詰めてみても「はあ……」と溜息
をつくばかり。

非常にムカつく。すっげえムカつく。

「話をまとめると、だ」

「ん」

「お前達は相談をしに来たのだろう？」

「ん」

「それでなぜ私が依頼した騎士を気絶させたというわけか」

「それは僕じゃなくてミラ姉のほうだよー。僕がそんな物騒なこと
するわけないじゃん」

「最後のほうは同意できないが、まあいい」

え？え？なんか話し進んじゃってるんですけど。

あたし誰かを気絶させた覚えはないんですけど。

「ちよちよっと待て！……ください」

あたしがレーランスの騎士を気絶させたのだという平和主義の自分には似つかわしくない誤解を解くべく、勇気を振り絞って会話に参戦。

「何？」

「何だね」

いっせいに二人の目がこちらに向いてきた。

うわあ、なんか怖い……………。

いきなりたじたじになってしまったあたし。だってなんか怖いし！怖い人に声をかけられたら逃げろってのは常識だし！いや、声をかけたのはあたしだけど、こんな状況は予知してないし！

「あ、あのさあ…………」

「うん」

「あたし、何もしてないよね」

「……………」

なんなんだ、この沈黙は。

「ミラ姉」

「は、はい」

厳かな声を出すアレクに声が裏返ったあたし。何、何なの！？

「そんなことはどうでもいい」

いきなり横槍入ってきたバアさん。今大事なとこなんだよ、邪魔すんな！

ギツとばかりに睨みつけると、誉れ高い北の魔女は眼を細くした。

「ほう…………あたしに喧嘩を売るってのかい？」

ああ、売ってやりますとも。

なんか最近ストレス溜まりっぱなしなもんだからここで発散させるのも悪くはない。原因はアレクとかアレクとか。

立ち上がったバアさんに続いて構える。

「あ……………！！」

臨戦状態のあたし達を破ったのはストレスの根源、アレクだった。「ああっ、もうなんなのこの人たち、僕ら探しに行くんでしょ！で、

入国許可とるためにこのババアに会いに着たんでしょ!! だったらとっとと話し始めろよ、このとんま!!」

「なっ」

「おい」

酷い言われように怒りが隠せないのは普通だと思う。つーかあんなのせいでストレス溜まってんだし。

なのにアレクはにっこり笑って

「このボロ家、燃やしちゃってもいいんだよ?」

なんて恐ろしいことを抜かしやがったのでひとまず休戦。

私達はしぶしぶ席に着いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6506f/>

月夜の聖句にご用心！？

2010年10月10日06時47分発行